

あかつき 道徳通信

教授用資料

巻頭コラム 道徳科の授業はすべからく楽しみを旨とすべき

横山 利弘（元関西学院大学教授）

実践レポート 道徳教科書を使った初めての授業

常深 晃史（神戸市立夢野の丘小学校教諭）

No. 1

2018年6月1日

巻頭 コラム

道徳科の授業はすべからく楽しみを旨とすべき

元関西学院大学教授 横山 利弘

教科化が発表されて以降、道徳の授業について多くの大学人や実践者が、それぞれの思い描く指導過程を発表してきました。このこと自体は、おそらく歓迎すべきことでしょう。

それらの授業論の提案者間で、それぞれの指導過程には道徳性の育成にどのような道筋が考えられているのかについて議論されるならば、多様な主張が飛び交うことは必ずしも悪いことではありません。

ところで、にわかにこうした状況を呈するに至ったのは、これまであまりにも硬直化した唯一の授業過程論が形式的に蔓延していたからだろうと思われます。もちろん、この授業過程論も間違っているとは言えません。問題は、道徳科の授業は「かくあるべし」と固定的に、反論を許さぬような形で蔓延したことにあります。これが、教員の自由な授業構想や自由な授業実践を阻む傾向があったことに問題があったのです。

したがって、今にわかに盛んになった授業論が、硬直的に「かくあるべし」と主張しているのであれば、それらはつまるところ新たな混乱を生じさせるだけと言えるでしょう。

そもそも授業の実際については、学校の状況や児童生徒の実態、そして何よりも教材によって異なるものです。こうした違いを一切捨象して主張される授業過程論はそもそも現実合わないのではないのでしょうか。

さて、中央教育審議会の答申は「道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」と述べています。これは誠に当然のことでしょう。しかし、どうすれば、児童生徒が日々の生活の中で様々な出来事と遭遇し行為・行動を決定するときに「道徳としての問題を考え続ける姿勢」を貫くことができるのでしょうか。また、どうすれば道徳の授業でそういう姿勢を培うことができるのでしょうか。私はここに至って、世人が物事を哲学的に考えることを避ける傾向の強いことに思いがつなかりました。哲学の取り扱う事柄やその思考はとても大切なことです。しかし人々はこれを避けます。それは哲学の講義が多くの場合、いたずらに高邁で難解で分かりにくいことと関係しているのではないのでしょうか。簡単に言えば、哲学の講義が楽しくなかったということでしょう。これと同じように考えると、道徳の授業が児童生徒にとって楽しくなければ、子どもたちは道徳的に考えるということのを避けるようになるということだと思います。

この際、様々な授業論を云々する前に、児童生徒が楽しいと思う授業を出発点にしてみてもどうでしょうか、というのが私の考えです。ともかく「道徳の授業は楽しいをもって旨とする」というわけです。道徳上の問題を「敬して遠ざける」ことにならないよう、専門家の道徳になってはならないと思います。ではどうすればよいのでしょうか。続きは次号で。乞うご期待！

実践レポート 「私の道徳授業」



道徳教科書を使った初めての授業

神戸市立夢野の丘小学校教諭
常深 晃史

はじめに この春の異動で勤務校へ着任したばかり。児童とも出会って2週間ほど。ようやくクラス全員の顔と名前が一致してきた頃、最初の道徳の授業を迎えた。初めての学校、初めて会ったばかりの児童。そして、教科書を使った初めての授業。初めてづくしの中での道徳の授業開きだった。

道徳の授業を行う上で、私は以下の点を心掛けるようにしている。

○発問を極力少なくする……発問が多すぎると、児童は疲れてしまう。中心発問に入るころにはグッタリ、は避けたい。

○リラックスして、ワイワイと……硬くならず、思ったことや考えたことを素直に言える雰囲気づくりを。日頃は黒板を向いている児童の机も、道徳の授業では教室の内側を向けて座る。

○対話をしっかり……ゆっくり、しっかり話を聞く。ぼそっとつぶやく一言を聞き漏らさぬよう。

いずれも児童がじっくりと、深く考えるための、授業者としては児童の考えたことや本音を少しでも捉えるための取り組みである。初めての授業。児童はどんなことを考え、何を話すのだろうか。オーソドックスな授業で、とにかくまずは児童としっかり向き合おう。そして「道徳って楽しいな」そう思われる授業がしたいと思った。

教材名 「まどガラスと魚」

主題名 正直な心

ねらい 窓ガラスを割って逃げてしまったが、お姉さんの姿を見て正直に謝ろうと考えた千一郎の気持ちについて考えることを通して、過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活しようとする道徳的実践意欲と態度を育てる。

内容項目 正直、誠実〔中学年A・(2)〕
過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること。

対象学年：小学校3年生

出典：廣済堂あかつき

「みんなで考え、話し合う 小学生のどうとく3」

授業の構想

■主題設定の理由

過ちや失敗は誰にでも起こり得ることであるが、とすると自分が損をしたり責められたりすることを避けるためにうそを言ったり、ごまかしをしたりすることがある。しかし、そのような振る舞いは、他者の信頼を失うばかりか、自分自身の中に後悔や自責の念、良心の呵責等を生じさせる。うそやごまかしのある状況では、とても明るい心で毎日を生きていくことはできない。正直にしていることの良さを考え、正直に明るい心で生活しようとする心を育てていくことが大切である。

■児童の実態

3年生になったばかり。うそはいけないということは、充分理解している。しかし、だからといって過ちを素直に認めることができるかという、そうはいかない。親に隠してこっそり食べたお菓子のことをまだ白状していない等、誰しもが似たような経験を少なからずしているのがこの年代の児童だろう。そのため、主人公のとった行動やその後の葛藤は身近なものとして捉えられるだろう。自分自身を偽る苦しさ気付かせながら、正直な心を育てていきたい。

■指導にあたって

導入は通常、教材名を告げる等、授業へ向けて児童の興味や関心を高めるために行うが、授業開きということで、本時では「道徳は何を勉強するの」と尋ねる。現段階で児童が道徳の学習をどう捉えているのかを掴むとともに、道徳の授業で考えるべきことについて確認をしておきたい。

範読後は、基本発問で「謝らなきゃ。でも……」と葛藤する主人公の心情についておさえる。いわゆる「分かっちゃいるけど……」という心情が確認できればよいので、ここではあまり時間をかけず、さっと進めたい。中心発問では、主人公がどうして謝ろうと決断したのかについてじっくりと考えさせたい。問い返しも適宜行いながら、自分の弱さを克服していく主人公の道徳的な変化を捉えさせたい。最後の基本発問では、過ちを正直に認めたことがもたらした、すがすがしさを感じさせたい。

教材の内容（あらすじ）

●よその家のガラスを割ってしまった千一郎は思わず逃げ出してしまう。謝罪に行くことができない千一郎のところに、近所のお姉さんがあじの干物をもってやってきた。「おたくでねこに魚を取られませんでしたか」。飼い猫が魚を取ってきたのを見て、一軒一軒謝罪に回っていたのだ。その翌日、千一郎は母に告白し、お詫びに行く。ガラスを割られた家の人は、「正直な子どもが来るのを待っていた」と、ボールを返してくれた。

学習活動	発問と予想される児童の反応	指導の留意点
＜導入＞ ＜展開＞ ■道徳の授業について知る。 教材を読む ■教材の内容を整理する。 ■ガラスを割って逃げてしまった主人公の心情について考える。 ■謝らないで逃げ続けている主人公の心の葛藤について考える。 ■お姉さんの謝る姿を見たことで正直に話そうと決心した主人公の心情について考える。 ■正直に謝った後の主人公の心情について考える。	○道徳の時間は、何を勉強する時間ですか。 ・正しいこと。 ・心。 ・人の気持ち。 ○千一郎は逃げながら、どんなことを考えていただろう。 ・逃げちゃいけない。 ・謝らなきゃ。 ・怒られる。 ・まずい。 ○次の日も、またその次の日も遠回りしてまで、千一郎がその家を見に行っただのは、なぜだろう。 ・その家の人が怒っていないか心配だったから。 ・今の様子が気になったから。 ・謝らなきゃと思ってはいたから。 ・割ったことがバレていないか気になったから。 ◎お姉さんがたずねてきた夜、千一郎はどんなことを考えて、お母さんに話そうと思ったのだろう。 ・きちんと謝らないと、その家のおじいさんに悪い。 ・バレてから謝っても、遅い。 ・言わなかったら、後悔してしまう。 ・こんなモヤモヤした気持ちをもち続けるのは嫌だ。 ・逃げるのは卑怯だ。 ・正直に言わないと、ほくはだめな人になってしまう。 ・お姉さん、かつこよかったな。 ・ほくもお姉さんみたいになりたいな。 ・お姉さんは猫のことでも謝っていたのに、ほくは……。 ○ボールを返してもらった千一郎は、どんなことを考えていただろう。 ・正直に話してよかった。 ・気持ちがすっきりした。 ・心のモヤモヤがとれた。 ・今度からはすぐに謝ろう。 ・怒られなかったのは、正直に話したからかな。	あまり長くならないように。心の魅力について考えていく。 教材を範読する。 話の設定をテンポよく押さえる。 謝らなきゃと思いながらも、逃げてしまったことを押さえる。 謝れずにいることが心の重荷になっていることを押さえる。 中心発問までテンポよく。 お姉さんの誠実な姿に触れたことをきっかけに、自分の弱さを克服していく主人公を捉えさせる。 ☆お姉さんはどうして1軒1軒回ってまで謝ったのだろう。 ☆どうしてあじ（干物）の目に見つめられたと思ったのだろう。 ☆あじの大きな目に何を見つめられたのだろう。 正直に話したことで心の重荷がとれ、すっきりできたことを確認させたい。
＜終末＞ ■教師の話を書く。 ■学習の感想を書く。	○今日の心の魅力は、「正直」でした。正直には、こんな言葉があります。「正直は一生の宝」。どんな意味かな。みなさん考えてみてください。	

まどがガラスと魚

にげやがらうとんかことと考えていたて

にげやだめだ。あやまらなきゃ、おこられる。

どうして次の日もその次の日も遠回りしてまで見に行、たの？

・かやんでいたから、あやまらう？このまま？

・はい、うちにおやま、ておかないと、まずいと思、ていたから、どうか、たか気にな、ていたから、でも、こわくてあやまれない、

どう考えてお母さんに話そうと思、た？

・ばちがあたる、

・心の中、でいつまでもぐるぐる、

・わこがと、た。それを見て、おかんと、お姉さんがあやま、てきたから、

↓

・正直にきこれた、でも自分、は、わるいことをした、ら、あやまらな、さ、で、された方はこまる、

・おじの干物に言われた、

「正直におやま、たらう？」

・あじい、おじいさん、

「だれかなあ、」

・にらまれた、

千一郎

不安、

不、

どう、

ボールを返してもらって

・あやま、てよかった、

・あやま、てすっきりした、

・おじいさん、やさしくてよかった、

・もとはやく言、ていれば、も、とはやく楽、

実践を振り返って

■道徳って何の勉強をするの

導入で尋ねた「道徳の時間は、何の勉強をする？」に対する児童からの答えは、「自然の勉強」「命のこと」「心」「環境」「気持ちの勉強」「頭の中のことを勉強する」というものだった。内容項目に関わるものや心、気持ちという答えが出てきていることから、児童なりに漠然とイメージを捉えていることがわかる。

■中心発問での主なやりとり

中心発問では、

C1：このままでは罰があたってしまう。

C2：このまま黙っていたら、心の中でいつまでもぐるぐる、ぐるぐるしてしまう。

C3：猫が魚をとって逃げた。それを見て、千一郎はあかんと思って、お母さんに言おうと思った。

C4：お姉さんが謝ってきたから。

T：なんでお姉さんみたいに謝ろうと思ったの。

C4：お姉さんは正直に謝りに来てくれた。でも、自分は謝っていない。自分はどうしようと思ったから。

C5：悪いことをしたら謝らなきゃと思ったから。でないと、やられた方は困るし、嫌な思いをする。

などのやりとりがあったが、最も多かったのが、あじの干物に関して。

C6：あじの干物は、本当は言っていないけど、「正直に謝ったら？」と言っているように思ったから。

T：あじの、それも干物に言われている気がしたの？

C7：私も似ている。あじがおじいさんみたいに見えたから。

T：あじが、おじいさん？

C7：おじいさんがずっと「誰かな～」と見ているように思えたから、謝ろうと思ったと思う。

C8：私もおじいさんに睨まれた気がしたんだと思う。

T：おじいさん、いないよ。ここに。それなのに、おじいさんに睨まれたと思ったのは、どうして？

C8：ガラスを割ったことをずっと心の中で思っていたから。だから、おじいさんに見られた気がしたんだと思う。

C9：謝らなあかんと思っていて。でも、できていなくて。それがずっと心の中に残っていて。でも、魚が「悪いことをしたら、謝らなあかん」って教えてくれた。

T：魚が教えてくれた？

C9：しゃべらへんけど、目で教えてくれた。

T：千一郎、あじに何を見られていたんやろう。

C9：心の中。心にたまったもの。それを放っておいたら、ずっと残ったままになってしまう。

T：心にたまったものを見られた？ 何がたまっていたの？

C9：不安。

C10：思い。どうしよう、ちゃんとしなきゃっていう思い。

■「まどガラスと魚」の思い出

数年前、4年生を受け持っていた時、5月の半ば頃に本教材で授業を行った。1か月後、クラスの保護者から「うちの子が万引きをした。今、謝りに行ってきた」と連絡が入った。翌日、本人に話を聞くと、取ったのは半年前（3年生の時）のこと。自分は取りたくなかったが、命令され怖くてやった。その後はずっと家に隠れていた、ということが分かった。どうして半年後になって話そうと思ったの？ そう尋ねると、「どうにもできず、しまいこんでいた。でも、最近になってその取ったものに見られているような気がしてきた。だんだんしんどくなってきて……。それでお母さんに言おうと思った」と。

一度はなかったことにしたはずの出来事。封じ込めたつもりでも、心のどこかでは引っかかっていたのだろう。それが何か(授業?)をきっかけに「見られている」と思うようになった。

中心発問でのやりとりから、この件を思い出した。あじの干物にしろ、取ったものにしろ、それらが実際に見ているわけではない。それなのに、なぜ「見られている」と思うのだろうか。何がそう思わせるのだろうか。

■児童の感想

授業後の感想であるが、今回はあえてテーマを与えず、1時間勉強して考えたことや思ったことを書くよう伝えた。初めての授業について、率直な感想が知れたからである。
・私なら千一郎みたいに、いろんなことを考えます。怖い気持ちやいろんな気持ちがいっぱいあります。でも、謝ろうと思いました。謝ったら楽になるのかなと思いました。謝ることや正直に伝えることは大切です。

・正直って、いいなあと思いました。僕もこんな人になりたいです。

・正直に謝ったからおじいさんもボールを返してくれたんだと思う。逃げずに謝ればいいなと思いました。

・私は千一郎みたいに家の人に言えなくて嘘をついたりしているから、千一郎みたいにちゃんと謝らなきゃと思いました。

・いいことをしたらすっきりすると思った。千一郎は自分からお母さんに言いに行ったから偉いと思った。

といった意見が少なからず見られた。児童が一生懸命考えることのできた授業だったのではないかと思う。

とはいえ、授業中何も答えられなかった児童やほとんど感想を書けなかった児童がいなかったわけではない。考える楽しさが少しでも味わえるよう、これからの1年間、一緒に歩いていきたいと思う。

■おわりに

初めてづくしだった本時ではあるが、唯一初めてでなかったのが教材。何度か使用したことがあり、授業には落ち着いて臨むことができた。振り返ってみると、課題が多く残った授業は初めて使用する教材であることが多い。教材の読みの甘さや、扱う価値への理解の浅さが原因なのだと思う。

これまでは副読本ということで、市内各校ばらばらの教材で授業を行っていた。しかし、教科書が定まったことで共通の土台の上に立つことができるようになった。実践等を共有していくことで、より深い授業研究が進められるのではないかと期待している。

あかつき道徳通信 No.1 教授用資料

発行 廣済堂あかつき株式会社

本資料の内容についてのお問い合わせは、小社編集部 (TEL :03-6435-6690) までお願いします。

この資料は、財団法人教科書協会の「教科書発行者行動規範」に則って作成されており、配布を許可されております。